

世界教養学科 中期留学

プログラム区分	中期留学
主幹部署・問合せ先	世界教養学科
研修先国・都市名	オーストラリア・ブリスベン
研修先	グリフィス大学
プログラム概要	世界教養中期留学プログラムは、9 週間の語学研修と約 2 週間のインターンシップを含む 3 か月間の留学プログラムです。渡航前には「オーストラリア学習会」を実施し、同国の歴史や多民族社会の形成、教育制度、文化などを学びます。学生は興味のあるテーマを調査し、意見交換を通じて渡航先への理解を深めます。 オーストラリア到着後は、グリフィス大学付属英語学校（GELI）でレベル別の英語クラスを受講し、英語力を集中的に高めます。多国籍のクラスメートと交流することで、他文化への理解も深まります。その後、インターンシップ準備コースで、職場での注意点や企業研究を行い、実習に備えます。 現地企業での約 2 週間のインターンシップでは、専門的な英会話力や実践的なコミュニケーション力を養います。ストレスのある環境で働くことで、職業観や人生観を見つめ直すきっかけにもなります。 また、ブリスベンでは多文化共生を体験できる機会が多く、ホストファミリーとの生活は異文化理解を深める貴重な体験です。 この研修を通じて、自分のコンフォートゾーンを広げ、将来に活かせる経験が得られるでしょう。 
日程	出発予定時期：2025 年 8 月下旬 帰国予定時期：2025 年 11 月下旬 期間：12 週間
単位認定	最大 16 単位
他学科生の受入れ	可 受入れ可の他学科：国際日本学科
語学研修の有無	有
引率者の有無	往路のみ引率有
住形態	ホームステイ
その他	4 月 24 日 12:30～募集説明会(オンライン)を実施します。

体験記

世界教養学科 中期留学に参加して

氏名：宮田知歩 （2024 年度参加）

私は中期留学を通して、日本とオーストラリアの様々な文化や習慣の違いを体感した。今回は二つの大きな違いについて取り上げる。一つ目は人柄だ。オーストラリアはマルチカルチャリズムの国であるため、人と比べる習慣があまりないように感じる。そのため、人の目を気にせず、自分のしたいように生活している人が多いと思った。例えば、バスに乗っていると、ドライバーと乗客が日常会話で盛り上がっている瞬間を良く見る。日本では仕事中に私語を話すことが良くないとされているが、オーストラリアでは仕事中でも人とのコミュニケーションを楽しんでいる様子がかがえた。また、私がバスに乗り遅れそうだと感じ、走ってバス停に向かった際には、ドライバーの方が「待っているから、そんなに焦らず落ちつきなさい」と声をかけてくれた。日本はマニュアル通りや時間通りの仕事大切にされているが、オーストラリアは何事に対しても自分自身や相手に寄り添った取り組みがされやすい国なのだと感じた。一方で、周りを気にしない性格の人が多いため、道にゴミが落ちている場面も良く見受けられる。私は夕食時にホストファミリーと日本の文化について話した事がある。ホストマザーは「日本の学校には掃除の時間があるって本当？それは凄く良い文化だと思う。」と話していた。日本人は”物を借りたときは、使う前よりも綺麗にして帰す”という感覚や”人にされて嫌なことは自分もしない”というような感覚がある。これは、些細な心がけではあるが、日本人全体が知っている常識のため日本は綺麗で清潔な国でいられるのだろうと考えた。二つ目は学校教育だ。私はワークエクスペリエンスで私立男子校の幼稚園から小学生クラスの日本語の授業を担当した。授業の中で特に日本との違いを感じた部分は児童の授業に対する態度だ。オーストラリアの児童は挙手や大きな反応をするなど、授業に意欲的に参加する。私はその姿に衝撃を受けた。日本の児童と何が違うのかを分析した結果、2つのポイントがある事に気が付いた。一つ目は上記で述べたオーストラリア人の人柄だ。人と比べず、自分の得意分野で頑張るという考え方が授業での前のめりな姿勢に繋がっている。そのため答えが合っていないかったり、日本語の読み方を間違えたりしても恥ずかしがらず次の学びに活かすことが出来ている。二つ目は先生の教育の仕方だ。日本と比べてオーストラリアの先生は児童と距離が近いように感じる。例えば、昼休みは児童が遊んでいるグラウンドに当番の先生が見回りに行き、児童とコミュニケーションをとっている姿が見受けられる。また、道で先生に会ったときに挨拶は勿論、Smalltalk をすることが当たり前である。授業中でも先生がグループや時間を全て区切るのではなく、児童と「誰と・何を・どれくらいの時間行うか」など相談して決めている。そのため児童も先生とコミュニケーションをとることに苦手意識を感じる事が少ないのだろう。また、各週で目標が決められるのだが、その目標が risktaker や challenge というような挑戦する事に重きを置いた目標が選ばれる。そのため、児童は正解する事よりも挑戦する事が重要だと分かっている。これは、日本にも取り入れるべき教育方針だと強く感じた。日本での学びとは、受験に合格するための勉強というイメージが強くある。そのため、回答が正解であることが重要視されやすく、答えがあっている保証がないと発表できないという消極的な授業環境が非常に多い。今日ではプレゼン力や社交性が重要視される世の中へと変わっている一方で、自分の意見を表現できなかったりどこまでも正解を追求してしまったりする行動は変えていく必要があると強く感じた。私は中期留学を通して、オーストラリアと日本の性格の違いと学校教育の違いについて深く考えることができた。

また、多くのバックグラウンドを持った人々や国籍の違う人々と関わる中で自分の中に新たな価値観や視点が増え、自分の将来や個性についてより明確に考える事が出来るようになった。日本の文化に疑問を持つ人や日本を窮屈だと思っている人は一度海外に行って、自国と自分を見つめ直す機会を作る事も今後の人生をより良く過ごすために鍵になると感じた。

